

スペイン、アメリカのシカゴなど欧米各国の農家を訪ね、泊めていただいたことも多いが、農家の庭先でお茶を飲む至福のひと時を忘れることはできない。

画一的なやり方でなく、それぞれの地域や農家の実態に合った多様なやり方を認め、農業ツーリズム、農家民宿、グリーンツーリズムなど、呼び方は色々だが、やり方も色々であっていいと思う。

一般に行政が補助金を出すという、ともすれば細かい条件を決めて画一化しようとする傾向があるが、この分野では農家の考え方や工夫、やり方に行政が合わせていくほうがいい。

大都市では、小さな区画を自由に作付けできる市民農園もさることながら、農家が指導する体験農園も人気がある。体験農園から兼業農家に進んだ例も私は知っている。農業体験も農業観光のひとつの柱になるだろう。海外からの観光客は体験を求めている。

東京には、一般の方が生活している島が11ある。アシタバ、レザーファン、ツバキ、サツマイモ、フリージア、パッションフルーツ、トマトをはじめ農業収入もある。

雨量は日本平均の約2倍あり、太陽と温暖な気候にも恵まれている。強風が吹くが昔からオオバヤシャブシなどが育って風除けの機能を果たしている。しかし消費地に運ぶのに時間と経費がかかるのが最大の難点である。

だから島しょ地域の農業にとって一番好ましいのは、観光客が増えることである。現地消費により運ぶコストを最小限に抑えることができる。観光客が増えれば焼酎その他、各種特産品の売り上げも増える。民宿、ダイビング店、釣り舟等の収入も増える。漁業にとっても運搬コストがかかる点は農業と事情は同じだから現地消費が望ましい。

これらを兼業している家も多いことから、観光振興が大切であることは皆、わかっている。しかし、青い空、美しい海、おいしい空気、気持ちのいい温泉は、日本中、至るところにあって、これだけでは勝負にならない。観光客にと

って、島に渡るのは時間とお金がかかる。それどころか、天候が悪化すると予定通りに島から帰れないリスクもある。

ギリシャの島々は、天候悪化のリスクは東京の島々と同じなのだが、世界の人を集めて相当の観光収入を得ている。東京の島々に比べてギリシャが違うのは一点だけ、建っている家々が白で統一され、青い海と空に映えて、とても美しいことである。

人々は観光に行ったとき、非日常的な光景を求める。大自然と人間の造形が調和したとびきりの美しさは映画の舞台になり、あるいは絵はがきになり、世界に映像で伝わっていく。観光は、まず、そこに住む人々の家々を美しく装うことから始めるべきだ。

4. 自転車と地域の交通

自転車は乗る人にとって快適だし、何よりも自動車に比べれば、はるかに環境に優しい。自治体や市民グループによるシェア自転車等の取組も進んでいる。

ヨーロッパやアメリカの大都市でも自転車利用は盛んになりつつある。ロンドンで、西部の主要駅であるパディントン駅のホームの一部が自転車置き場になった。近年はシティ周辺の都心部で、オフィスビルに自動車ではなく自転車の置き場が目立つようになった。シャワールームとロッカーが併設されている。自転車通勤が増えているからだ。



ニューヨークでも自転車レーンが設けられている道路が、近年、目に見えて増えている。ベルリン等ではずっと以前から、郊外へ行く鉄道だけでなく地下鉄車両にも自転車を乗せるスペースが設置されていた。

元々、自転車と歩行者が対立するのは、日本の道路が一般に狭いからでもある。自動車が一気に増えた高度経済成長時代に、道路を急増させたため、道路づくりそのものが市民の対立を生んだ。そして特定の道路に自動車が殺到し、道路といえば公害、という時代が確かにあった。しかし今や、時代が大きく変わって、環境改善のためにも、また多くの機能を提供するための道路を考えるべき時代である。多摩や島しょには、自転車道を増やす余地がある場所もあり、この点では区部に比べて有利だと思う。

5. 小都市の魅力

ロンドンの人たちは、まちの内部において先に述べた田園都市か、実現しなくとも、まちの周囲を田園で囲むことはできると考えて、巨大都市ロンドンを取り囲むグリーン・ベルトを実現させた。今でもロンドンのグリーン・ベルトは頑固に守られている。ところが都市はあくまで外延的に発展しようとする。そこで、ロンドンは世界有数の大都市でありながらコンパクト・シティ、すなわち高密度都市を宣言し、中心部は容積率制度を撤廃して高層ビルをつくることにした。

このような考え方とは多少、趣きが違うが、フランスのヴェルサイユ宮殿や中国の王宮、あるいは日本の大名庭園など、ハワード以前につくられた「大規模な建築物」、言い換えれば「小規模なまち」も、「庭園」の機能と「都市」の機能を兼ね備えた一種のまちを形成することを目指した。

筆者も参加して2001年につくった日本の「庭園都市日本構想」は、各界の有識者によって任意につくられた研究会の成果である。ここでは、庭園都市を、ハワードが提起したコンセプトに加えて「落ちついたライフスタイル、循環型社

会システム、コミュニティ意識、多様な情報と高いインタラクティブ性、豊かな国際性」など現代のまちに要求される要素を加味した。この構想の副題は「コンパクト・シティとグリーン・ネットワーク」とした。

日本には、いや、どこの国にも大都市と小都市と、両方あっていい。しかしどうやら、都市においてどこから学ぶかという、大都市からよりも、小都市から学ぶことの方が多様な気がする。世界をめぐる生活をしていて、近年しきりに思うのは、そういった小都市の魅力についてである。都市の利便性と快適性を具現できるのは、小都市か、もしくは大都市のなかにあってもそれなりに特性を強く持つ地域ではないかと思う。

